

うたのさまむつなり

出雲路 修

《古今和歌集》の仮名序の「うたのさま」の分類についての叙述は、仮名序それ自体の文脈においてまずは理解されねばならない。それが真名序に見える「六義」（いうまでもなく、詩の六義の流用）とどのようにかかわるか、といったことはまたべつの問題である。

われわれに与えられているものは、仮名序の叙述だけである。分類された「うたのさま」の名称（すなわち、「そへうた」「かぞへうた」「なぞらへうた」「たとへうた」「ただことうた」「いはひうた」と、一首ずつの例歌とである。例歌をも貫之以外の手に成る増補とする説は、いまはとらない。貫之の手に成る例証として、一貫した論理が見出せるからである。名称と例歌と、そして、叙述の順序のもつ意味を考慮にいれるにしても、与えられているものは多くはない。しかし、これで十分に意がつうじるであろう、という貫之の口吻が、この叙述には、ある。

そもそもうたのさまむつなり。からのうたにもかくぞあるべき。

詩の「へさま」の分類としても妥当な、普遍的な、「うた」の「へさま」

うたのさまむつなり

の分類を、貫之は提示する。

そのむくさのひとつには、そへうた。

おほささきのみかどをそへたてまつれるうた、

なにはづにさくやこの花ふゆこもりいまははるべとさくやこのはな
といへるなるべし。

「うた」の作者が読者に示し伝えようと意図するところを直接に表現する叙述を「へ情」

「へ情」の存在を前提として、それを間接に表現する叙述を「へ喩」と小稿ではかりに呼称して、以下の論をすすめたい。適切な用語がみあたらないゆえの一時的な処置である。「うた」における「へ情」と「へ喩」との関係のありかたを基準として分類がなされている、と考えてのことである。冒頭に置かれた「そへうた」が、「うた」を「そへ」ということと立項されているところに、この分類が「うた」の修辞によるものであることがみてとれる。

この「そへうた」では、「うた」が全体として「へ喩」となっている。

読者に伝えられるべき〈情〉はへうたに明示されはしない。〈情〉はへうたの外に明示されて存する。しかも、そのことをさし示すことは、へうたの外（たとえば例歌のばあいには、詞書）でなされる。したがって、当然のことながら、〈情〉は〈喩〉から、〈喩〉は〈情〉から、独立している。

例歌によって示せば、

〈情〉は「おほさぎのみこと」ノコト。

〈喩〉は「なにはづにさくやこの花ふゆごもりいまははるべとさくやこのはな」。

ふたつには、かぞへうた。

さく花におもひつくみのあぢきなさ身にいたつきのいるもしらずてといへるなるべし。

この「かぞへうた」も、「そへうた」と同じく、へうたは全体として〈喩〉となっている。しかし、「そへうた」とはことなり、読者に伝えられるべき〈情〉がへうたに表現され、明示されている。しかも、

〈喩〉は〈情〉から独立している。

例歌によって示せば、

〈情〉は「つぐみ・あぢ・いたつきのいる」。

〈喩〉は「さく花におもひつくみのあぢきなさ身にいたつきのいるもしらずて」。

あるいは、小稿でのこのような論述は、〈情〉と〈喩〉とを逆転させているような印象を与えるかもしれないが、「合せ薫物、少し」〈情〉を「あふさかも、はてはいききの、せきもるず、たづねてとひこ、きな

ばかへさじ」〈喩〉と表現する例（十訓抄）や「思はむには添ひ寝む」〈情〉を「おもひあらば、むぐらのやどに、ねもしなむ、ひしきものには、そでをしつつも」〈喩〉と表現する例（伊勢物語）第三段を念頭に置かならば、違和感も少ないであろう。《古今集》巻一〇「物名」は、物名・折句・杵冠を区別していない。同一の修辞である、との認識があろう。

みつには、なずらへうた。

きみにけさあしたのしものおきていなばこひしきごとにきえやわたらむ

といへるなるべし。

「なずらへうた」では、読者に伝えられるべき〈情〉がへうたに表現され、明示される。〈喩〉もへうたに表現される。〈情〉と〈喩〉とはたがいに独立することなく、たがいに依存している。

例歌によって示せば、

〈情〉は「きみにけさ……おきていなばこひしきごとにきえやわたらむ」。

〈喩〉は「あしたのしものおきて・きえやわたらむ」。

よつには、たとへうた。

わがこひはよむともつきじありそらみのはまのまさはよみつくと

といへるなるべし。

「たとへうた」では、〈情〉と〈喩〉とがともにへうたに表現され、明示される。しかも、〈情〉が〈情〉であること・〈喩〉が〈喩〉

であること、も、〈うた〉に明示される。

例歌によって示せば、

〈情〉は「わがこひはよむともつきじ」。

〈喩〉は「ありそうみのはまのまきごはよみつくすとも」。

ここでは、「とも」が〈情〉と〈喩〉との関係を明示するものとなっている。〈情〉が〈情〉たらしめられ、〈喩〉が〈喩〉たらしめられている。

いつつには、ただことうた。

いつはりのなき世なりせばいばかり人のことのはうれしからましといへるなるべし。

「ただことうた」では、〈うた〉は全体として〈情〉となっている。

例歌によって示せば、

〈情〉は「いつはりのなき世なりせばいばかり人のことのはうれしからまし」。

〈喩〉は、ナシ。

むつには、いはひうた。

このとはむべもとみけりさき草のみつばよつばにとのづくりせりとつへるなるべし。

「いはひうた」は、その名称と例歌とより推すに、いわゆる枕詞の類による修辭をさすのであろう。〈喩〉が一回性を脱したものの。上述の「なずらへうた」の分類とみてよい。

例歌によって示せば、

〈情〉は「このとはむべもとみけり……みつばよつばにとのづくり

うたのさまむつなり

せり」。

〈喩〉は「さき草のみつばよつばに」。

※

古注に「おほよそ、むくさにわかれむ事は、えあるまじき事になむ」とし、現代の研究者もこれに従っているようにさえみえる。貫之のおこなったことを〈うた〉の分類と誤解しての言である。貫之のおこなったのは、〈うた〉の〈さま〉の分類である。したがって、ある〈うた〉を、複数の〈さま〉を有するものとして、複数の項に分類することもありえよう。そのようなばあいをも想定するならば、上述の分類のありかたは、〈情〉と〈喩〉との関係のありかたを基準としてなされた分類として、〈うた〉の〈さま〉の分類として、十全であるように思われる。

「そもそもうたのさまむつなり。からのうたにもかくぞあるべき」

《古今集》の本文は、《新編国歌大観》に拠る。私に句読点をほとんどこし、書式を改めた。「いたづき」は「いたつき」と改めた。